

我が家の執事、シオンはとにかく距離が近い。

「お嬢様、今日も世界で一番可愛いですね。あ、照れた。耳まで真っ赤ですよ？」

午後の柔らかな光が差し込む図書室。調べ物をする私のすぐ隣で、シオンが当然のような顔で甘い言葉をささやいてくる。至近距離で響く、地を這うように低く、それでいて体の芯をじりじりと熱くさせる響き。その声を聞くだけで、下腹部の奥がキュウと甘くうずき、意識のすべてが彼の吐息に奪われてしまう。

「……もう、シオン耳元で言わないで。からかわないでっいつも言うてるでしょ」

私は抱えていた本を盾にするようにして、精一杯の抗議をした。けれど、彼が半歩距離を詰めるだけで、腕に抱えた本越しに伝わってくる彼の体温に、思考が真っ白に染まってしまう。

「からかってなんていませんよ。俺はいつだって本気です。……お嬢様が息もできなくなるくらい、甘やかしてあげたいって思ってますよ」

シオンは不敵に微笑むと、私の頬にかかった一房の髪を、長い指先で愛おしそうになぞった。その指先が首筋に触れた瞬間、全身に微弱な電流が走ったかのような錯覚を覚える。

「……そういうことを言うのが、からかってるって言うの」

「お嬢様を褒めるのが執事の務めですから。喜んでいただけなんなんて、心外だなあ」

艶やかな黒髪を揺らし、切れ長の深い紫色の瞳を悪戯っぽく細めて私を見つめる彼は、物心つく前から私の身の回りすべてを管理してくれている。一歳年上の彼は、私にとって最も身近で、最も厄介で……そして、誰よりも魅力的な存在だ。

完璧な容姿、流麗な会話、そして私のすべてを先回りして把握する有能

さ。屋敷の誰もが彼を賞賛し、街へ出れば令嬢たちの視線を独占する。そんな彼が、私に対してだけは、主従の枠を超えた逃げ場のない熱を隠そうともしない。

「……本当に、シオンは昔からそうなんだから。誰にでもそうやって……」
「誰にでも？ ……今、なんて言いましたか？」

私の小さな呟きを聞き逃さず、シオンの空気が一変した。悪戯っぽさが消え、そこには私を食い尽くそうとする獣のような独占欲が剥き出しになる。彼は私の手から本を取り上げると、無造作に机に置いた。

そのまま私の背中を本棚へと押しやり、逃げ場を塞ぐように両手を突いて、私を見下ろす。視界から彼以外のすべてが消え、静まり返った図書室に、二人の重なる吐息の音だけが響く。

「俺がこんなに甘く、狂おしいほどに求めているのは……世界中で、お嬢様だけだよ。わかってる？」

彼が顔を寄せ、耳元で吐息とともにささやいた。射抜くような視線に見つめられ、私は不意に思い出す。シオンに初めて出会い、私の世界が塗り替えられた、あの日のことを。

第一章 初恋の誓い

——今からちょうど十年前。

お父様に連れられて屋敷にやってきた一人の少年をひと目見た瞬間、息を吸うのも忘れて見惚れてしまった。

「今日からお前の執事見習いとして、この屋敷で暮らすことになったシオンだ。仲良くしてあげなさい」

お父様はそう言いながら、どこか遠い日を懐かしむような、柔らかな目でシオンを見つめていた。

お父様の後ろから一歩前に出た少年は、子ども心にも息を吞むほど整った顔立ちをしていた。夜の闇を溶かしたような黒髪に、吸い込まれそうなほど深い紫色の瞳。豪商の娘として、高価な美術品や美しい宝石は数多く見てきたけれど、これほどまでに気高く、冷ややかな美しさを漂わせてい

る人間は初めてだった。

あまりの神々しさに、内気な私は挨拶も忘れて呆然と立ち尽くしてしまった。すると、私の視線に気づいた彼も、ほんのりと頬を桜色に染める。

「……あの、お嬢様？　どうかされましたか？」

「あ……えっと、その……」

戸惑う私を前に、彼はお父様と一瞬だけ、子どもらしからぬ鋭い視線を交わした。それは単なる主従の挨拶ではなく、何か重い契約を無言で確認し合う、共犯者のような眼差し。けれど、彼はすぐに意を決したように背筋をピンと伸ばすと、私の目の前で静かに片膝を突いて跪いた。

「シオンです。今日から貴女の立派な執事になるために参りました。よろしくお願いします、お嬢様」

彼は少し震える手で私の右手をそっと取ると、緊張した慣れない手つきで引き寄せた。

チュッ…。

吸い付くような、密やかな音。私の白く小さな手の甲に、彼のまだ幼さの残る柔らかな唇が、熱を持って押し当てられる。

「!?」

肌に触れた瞬間の、羽毛が触れたような繊細な感触。けれど、そこから伝わってくる体温は驚くほど高く、私の心臓は今まで聞いたこともないような音を立てて暴れだした。友達も少なく、いつも図書室で物語を読んでいたばかりいた私にとって、それはまるでおとぎ話の王子様が、約束のキスを捧げるために本から飛び出してきたような光景だった。

「……お嬢様？」

唇を離し、顔を上げたシオンと視線がぶつかる。彼は執事として凜とした顔を作ろうとしていたけれど、至近距離で見つめ合う熱に耐えきれなくなったのか、その白い頬を林檎のように赤く染めていた。私はあまりの格

好良さに言葉を失い、立ち尽くし、彼を凝視することしかできない。

けれど、ただ守られるだけの子どもではいたくなくて。私は震える小さな手で、彼の温かな手をぎゅっと握り返した。

「……シオン。私、がんばるね。あなたが、ずっと私の傍にいてよかったと思うくらい、立派なご主人様になるから。だから……ずっと、私のそばで、お世話してね」

引っ込み思案な私が、一生懸命に言葉を選んで放った、精一杯の約束。甘えるだけではなく、幼いながらも主（あるじ）として彼を必要とする言葉を発すると、シオンは息を呑んだ。

「っ……！」

その瞬間、シオンの深い紫色の瞳が、驚きから陶酔を孕んだ熱いものへと変わったように感じた。彼は私の小さな手を、二度と離さないと誓うように、執事の礼法を忘れて強く握りしめていた。

「……はい。約束です、お嬢様。お嬢様が立派な主人になれるよう、俺が一生、一番近くで見守ります。……たとえお嬢様が『もういい』って言うっても、俺は絶対に、お側を離れませんから」

子どもの誓いにしてはあまりに重く、一途な執着が滲む彼の声。没落し、かつての栄光を失った貴族の家に生まれた彼にとって、誇りを捨ててこの豪商の家に身を沈める覚悟は並大抵のものではなかったはずだ。その言葉は主従の契り以上の、魂の隷属を意味していた。

かっこいい……。

声にもならない吐息が、唇の隙間からこぼれ落ちる。無防備でいながら、幼い心で自分を律しようとする私の目に、シオンはとても魅力的に見えた。これが、私とシオンの始まり。私の、たったひとつの初恋だった。

あの日以来、私はシオンの顔を見るだけで胸がいっぱいになってしまい、

自分から話しかけることなんて到底できなくなってしまった。図書室の隅で、本に顔を埋めていても、彼の気配がするだけで、心臓がバクバク鳴って綺麗な挿絵が滲んでしまう。

そんな私を、シオンは困ったような、でもどこか愛おしそうな顔で見つめていた。彼は無理に距離を詰めようとはせず、いつも私の一歩後ろから、静かに、優しく声をかけてくれた。

「お嬢様、またその本を読まれているのですか？　今日は、星の欠片を閉じ込めたようなダイヤモンドのページですね」

「……あ、シオン。……ええ、このお話、とっても素敵で……」

私が本から目を上げられずに小さな声で答えると、シオンは私の隣にそっと膝をつき、私を怖がらせない穏やかな声で話し始めた。

「そうですか。もしよろしければ、俺にもお話、少し教えていただいけませんか？　お嬢様が大切に読まれている物語を、俺も知りたいんです」

「私でよければ、いいけれど……。シオン、お仕事の邪魔じゃないかしら？」

思わず本を少し開いてシオンを見ると、彼はパツと顔を輝かせた。

「もちろんです！ お嬢様のお話を聞けるなら、どんな仕事よりも幸せですよ。……あ、お隣、失礼してもよろしいでしょうか」

シオンが嬉しそうに微笑むと、私の緊張は春の雪が溶けるように消えていった。私は彼の隣で、自分だけの秘密を、勇気を出して口にした。

「……ねえ、シオン。あのね。実は、この本よりも面白い話があって……。私の家に伝わってる、世界に一つだけの幻の指輪があるの。」

「指輪ですか……？」

「代々、お祖母様、お母様が結婚する時に必要になった指輪。宝石商だった我が家だけが繋がってる、あるすごい職人さんだけが作れるんだって。でも、今はその職人さんがどこにいるか、誰も知らないの」

「幻の職人が打つ、世界に一つだけの……指輪」

私が頷くと、シオンは深く、何かに打たれたような表情で聞き入った。

「そうなの。お父様も一生懸命探しているけれど、見つけるのはとっても大変だって……。私、いつか、もし……」

私は恥ずかしさを堪えて、彼の服の袖をそっと、壊れ物を扱うように握りしめた。

「……もし、私がその指輪を見つけ出せたら……シオン、私のお願いを一つだけ、聞いてくれる？」

「……はい、もちろんです。お嬢様のためなら、俺にできることなら何でも」

シオンが真剣な眼差しで私を見つめるので、私は熱くなる顔を隠すように俯いた。

「……約束よ。私が指輪を自力で見つけたら、シオン、私のお願いを、な

んでも聞いてね。……だから、それまでずっと、私のそばにいて」

十歳の私が精一杯の声を振り絞って伝えると、シオンは驚いたように目を見開き、それから情熱を帯びた顔で笑った。

「約束です。……お嬢様がその指輪を手にしたら、俺は必ずお嬢様の願いを叶えます」

彼は私の小さな手を、包み込むように優しく握りしめた。

シオン。もし私がその指輪を見つけたら、あなたに「私と結婚して」ってお願いするわ。胸の奥で、まだ言葉にできない熱い想いがちりりと跳ねる。本の中のお嬢様が王子様と結ばれるように、いつか本物の指輪を自身で見つけ出して、大好きな彼を私のものにしたい。

シオンの手の温もりと、私の幼い野心は、決して消えない約束として十歳の私の心に深く刻み込まれていった。

第二章 恋の自覚

——それから月日は流れ、私が十五歳になった頃。

シオンが屋敷に来てから、約五年が経っていた。

かつてのぎこちなさは消え、私たちは何でも言い合える、気心の知れた主従になっていた。……あるいは、それ以上の何かを互いに感じていたのかもしれない。

ある日の午後、私は図書室の窓際で一冊の恋愛小説に没頭していた。シオンは少し離れた場所で、私の飲み物を準備しながら静かに控えている。

「……シオン、この本、すごいの」

「珍しく熱心ですね。どんな話ですか？」

シオンが流れるような所作で紅茶を机に置き、私の手元を覗き込んできた。ふわりと香る、彼特有の清潔な石鹸の匂い。

「……身分違いの恋の話。執事の男性が、お嬢様に内緒でずっと片想いをしているの。でも、彼は自分の立場をわきまえていて、決して想いを口にしない。……切なすぎて、胸が苦しくなっちゃう」

私が本のページをなぞりながら溜息をつくとき、シオンはふっと目を細めて、どこか遠くを見るような表情を浮かべた。

「……そうなんだ。その執事は、賢い選択をしていますね」

「えっ？ どうして？ 好きなら、言えばいいのに」

「言えないですよ。……もし想いを伝えて、今の関係が壊れてしまったら？ お側にいられなくなるくらいなら、一生隠し通すのが、執事としての『愛』なんじゃないですか？」

シオンの言葉は、まるで自分自身に言い聞かせているかのように重く、熱を帯びていた。その瞬間、私の頭の中に、これまでの約五年間の光景が走馬灯のように駆け巡った。

泥だらけの手を拭いてくれた時。泣いている私の頭を、優しく撫でてくれた時。そして、いつも一歩後ろから、私だけを見つめてくれていたあの眼差し。

……あ。そっか。

胸の奥が、ドクンと大きな音を立てた。物語の中の執事に自分を重ねていたんじゃない。私は、目の前にいるこの人に……シオンに、ずっと恋をしていたんだ。

「……シオン。……シオンはどうなの？」

「え？」

「シオンも……もし好きな人ができたら、そんな風に隠しちゃうの？」

私が不安そうに彼を見上げると、シオンは一瞬、驚いたように目を見開いた。けれどすぐに、彼はいつもの余裕たっぷりな笑みを浮かべて、私の顔を覗き込んできた。

「……さあ、どうでしょうね。俺なら……隠し通せる自信、ないかもしれない」

そう言って、彼は私の頬に触れるか触れないかの距離まで顔を近づけ、悪戯っぽく、でも切なそうに微笑んだ。

この時、私は確信した。この五年間、私の中に根を張っていたこの想いは、もう憧れなんて言葉じゃ収まりきらない。私は、この意地悪で優しい執事に、逃れられないほど恋をしてしまっているのだと。

十六歳の誕生日を境に、屋敷に届けられる手紙の山は一段と高くなる一方だった。かつて幼い少女が、結婚を見据える年齢の豪商の令嬢になったからだ。

私は机に積み重ねられた豪華な装飾の手紙を眺めては、重い溜息をつくのが日課になっていた。

「……また、新しいお手紙？　なんだか、申し訳なくなっちゃうわ。皆、私のことを誤解されているんじゃないかしら」

私が顔を伏せてぽつりと零すと、背後で紅茶を淹れていたシオンが、わざとらしく大きな溜息を吐いて近づいてきた。

「本当に。次から次へと……。お嬢様の魅力が世界にバレてしまったみたいで、執事としては鼻が高い反面、一人の男としては夜も眠れないほど穏やかじゃないんですよ」

シオンは手慣れた手つきでカップを置くと、椅子に座る私のすぐ後ろに立ち、髪に触れるか触れないかの距離で身を乗り出してきた。

「ねえシオン、またそうやって……。私をからかわないでって、いつも言っているじゃない」

「からかっているように見えますか？　俺はいたって真面目です。……あれ、今日のお手紙は隣街の有力な家系からですね。彼、なかなかの美男子

だと評判ですが、お嬢様の好みですか？」

彼は手紙の束を一枚摘み上げると、それを私の目の前でひらひらと揺らした。

「そんなの、会ったこともないもの……。それに、きっと皆は私のことを勘違いしているわ。豪商の娘のくせに、商売の才能もなくて……。ただ本を読んでいるだけの陰気臭い女だって知ったら、皆すぐに興味をなくして、逃げ出してしまおうよ」

自嘲気味に視線を落とした私を見て、シオンの手が止まった。彼は、私の椅子の背もたれに両手をついて、私を閉じ込めた。

「……逃げ出す？ ふふ、お嬢様は相変わらず、ご自分の価値を分かっているじゃない」

シオンは至近距離で目を細め、逃がさないと言わんばかりに距離を詰めてくる。

「もし俺が執事なんて肩書きを捨てて、一人の男として立候補したら？

お嬢様は、その山のような手紙の一番上に、俺の名前を置いてくれますか？ 本の虫で、優しくて、誰よりも思慮深い……そんなお嬢様を独り占めしたい男が、ここに一人いるとしたら」

彼の声は甘く、けれどどこか切羽詰まったような熱を帯びていた。あまりに真っ直ぐな眼差しに耐えきれず、私は視線を泳がせる。

「……また、そうやって。すぐそうやって、私が困るようなことばかり。

……意地悪ね」

「お嬢様、お顔が真っ赤ですよ。……お嬢様を困らせるのは、俺の特権ですから。他所の男にその顔を見せるくらいなら、俺が一生かけて、冗談か本気かわからない愛の言葉で、貴女の耳を塞いで差し上げます」

そう言って、彼は私の耳元に唇を寄せ、ふっと熱い吐息を吹きかけた。

「……覚悟しておいてくださいね。俺の愛は、案外、しつこいですよ？」

クスクスと喉の奥で笑いながら、彼は何事もなかったかのように身を引き、優雅に一礼する。その微笑みの裏に、私だけが知る一途な独占欲が透けて見えた。

……もう、本当に心臓に悪い。

——二十歳の誕生日を過ぎて間もない、ある日のことだった。

屋敷の空気は、これまでになくお見合いの話題で持ちきりになっていた。豪商の娘として本格的な適齢期を迎え、お母様の焦りがピークに達していたからだ。

「……また、新しいお見合いのお話？　昨日もお断りしたはずよ、お母様」
応接室に呼び出された私を待っていたのは、テーブルの上に丁寧に並べられた名家の子息たちの写真だった。お母様が困ったように眉を下げ、落ち着かない様子で紅茶を注ぐ。

「あなた、もう二十歳でしょう？　理想があるのはわかるけれど、そろそろ将来を決めないと。お友達はみんなもうお嫁の行き先を決めてるでしょう。」

「そんなこと言われても……」

「ほら、この侯爵家の方はとても誠実で、あなたの読書の趣味も理解してくれるそうよ。代々続く宝飾関係の伝脈もお持ちだから、あなたがずっと探している、あの、伝説の指輪を作れる職人だって、きっと見つけ出してくださるわ」

「……今はまだ、図書室で静かに過ごしているのが一番落ち着く。結婚なんて、考えられないわ」

私が視線を逸らすと、お母様はますます不安そうに身を乗り出してきた。

「お仕事の手伝いも大切だけど、女の幸せだってあるのよ。ああ、どうしてどの方にも首を縦に振ってくれないのかしら……」

すると、横で静かに書類に目を通していたお父様が、ふっと顔を上げた。その目は、商売人としての鋭さと、娘の心の奥底を見抜いているような、妙に落ち着いた光を宿している。まるで、かつて自分自身が同じ道を辿った者だけが持つ、懐かしさを含んだ眼差しだった。

「……お前、もしかしてシオンのことがそんなに好きなのか？」
「!?」

あまりに唐突で、けれど核心を突くようなお父様の問いに、全身の体温が一気に上がった。

「ちょ、ちょっと、あなた！ 何を言ってるの!？」

お母様が驚きでカップを鳴らし、慌てて私とお父様の顔を交互に見る。

「シオンはあくまで執事なのよ？ たしかに二人は幼い頃から仲が良いし、あの子はとても優秀で優しいけれど……身分が違いすぎるわ。」

お母様の現実的な言葉が、冷たく胸に突き刺さる。

「それに、もし万が一、あの子と婚約したとしても、あの子にあの伝説の指輪を作れる職人なんて、見つけられるはずがないでしょう？　夢を見るのもいい加減になさい」

「……何を言ってるの、お父様もお母様も。冗談でも、そんなこと言わないで。……シオンは、ただの執事だもの」

精一杯の冷静さを装って否定したけれど、自分の声が微かに震えているのが分かった。私が指輪にこだわっているのは、それを見つけた時にシオンへ伝える「一生のお願い」があるからだなんて、口が裂けても言えない。「冗談ならいいんだがな。どんな立派な家柄の男を連れてきても、お前の心には届かない。……だが、あいつという時のお前は、誰よりも楽しそうに見える」

お父様はそれ以上追及せず、ただ試すように口角を上げた。

「……そんなこと、ないわ」

静かに、けれど必死にその場をやり過ごそうと視線を伏せた。否定すればするほど、心の中にある本音をさらけ出しているような気がして、私は逃げるように応接室を後にした。

パタン、と重い扉を閉めると、冷たい廊下の空気が火照った頬をなでた。「自力で見つけるって、あの日約束したのに……」

十歳のあの日から、私は屋敷の中を歩くたび、どこかに指輪の、あるいはあの職人の居場所のヒントが隠されていないか探し続けてきた。豪商である我が家の膨大な蔵書を、一冊ずつ、それこそ目が痛くなるほどめくってきたけれど、その数はあまりに多すぎて十年経った今でもまだ読み終わっていない。

「……残るは、屋根裏にある古い本だけ。あそこさえ調べ尽くせば、きっと何かが見つかるはず」

内気な私にできる、たった一つの冒険。もしこのままヒントすら見つけ

られなければ、私はシオンに「私と結婚して」というあのお願いをするこ
とさえ許されないまま、誰か知らない人の元へ嫁がされてしまう。

「どうしよう、シオン……」

焦りと不安が胸の奥で渦を巻き、視界がじんわりと滲んだ。廊下を足早
に進み、玄関ホールに辿り着いた時。ちょうど買い出しから戻ってきたシ
オンと、真正面から鉢合わせた。

「お嬢様？ そんなに慌てて、どちらへ？」

聞き慣れた、少し挑発的で、でも誰よりも優しい声。シオンは腕に抱え
た荷物を軽く持ち直し、不思議そうに首を傾げた。

「おかえりなさい、シオン。……早かったのね」

シオンは荷物を置くと、すべてを見透かしたような妖艶な笑みを浮かべ
て、私との距離を一步詰めてきた。

あまりの近さに鼓動が速まった。私は思わず後退りしようとしたけれど、

彼は逃がしてはくれない。私の背後にある壁にそつと手を突き、私を閉じ込める。

「……何、その顔。何か隠し事？ ……それとも、俺に言えない悪いことでも考えてるんですか？」

「な、なんでもないわ……。お父様にお見合いの話をされて、少し疲れただけよ」

嘘ではないけれど、本当の理由、指輪のヒントが未だに見つからない焦り……は飲み込んだ。シオンは私をじっと見つめ、一瞬だけ真剣な眼差しを向けた。

「そう。お嬢様は相変わらず嘘が下手だな。……まあいいですよ。今は買い出しの荷物を片付けてくるから。紅茶を淹れて部屋に行くので、それまで大人しく休んでいてください」

シオンは壁に付いていた手を離すと、優雅に一礼して荷物を抱え直した。

彼の足音がキッチンの奥へと消えていく。今がチャンスだ。シオンが戻ってくるまでの短い時間なら、一人で動ける。

私はドレスの裾を少し持ち上げ、静まり返った屋敷の階段を上った。目指すのは、普段は誰も寄り付かない埃っぽい屋根裏部屋。

ギギ……と重い扉を開けると、そこには古い家具やガラクタに混じって、革表紙の剥げかけた本が山積みになっていた。

「ここにある本を全部調べれば、今度こそ……」

私は鼻をつく古紙の匂いに耐えながら、一番手前にあった分厚い一冊を手にとった。背表紙には、お母様が時折懐かしそうに語る、お祖母様の蔵書を示す小さな蔵書印が押されている。期待に胸を膨らませてページをめくる。指輪の製法や、職人の名前が記されているはずだと信じて。

「……えっ？」

目に飛び込んできたのは、煌びやかな宝石の挿絵ではなく、絡み合う男

女の姿を描いたひどく扇情的な挿絵だった。

「な、何これ……」

内気な私が見るにはあまりに刺激が強すぎて、顔が一気に沸騰した。けれど、文字を追う指が止まらない。そこには、私が今まで読んできたどのおとぎ話にも載っていないような、熱く、狂おしい愛の交わりが綴られていた。

『執事は主の耳元で、甘い毒のように愛をささやいた——』

物語の中の執事が、主である女性に施す愛撫の描写。それが、時折シオンが私に見せる熱い眼差しや、耳元でささやく吐息の温度と重なって、頭がクラクラする。

「いけないわ、こんなの……早く閉じないと……」

そう思うのに、本を閉じるどころか、私は吸い寄せられるように床に座り込み、その禁断のページを夢中でめくり始めてしまった。

「恋人同士って……こんなこと、するの……？」

私がこれまで読んできた騎士道物語には一度だって出てこなかった情景。肌と肌が触れ合い、互いの体温を溶かし合うような、あまりに情熱的な愛の形。知らないことが多すぎて、一文字追うごとに耳の裏まで真っ赤に染まるような拍動が全身を駆け巡り、呼吸が熱く乱れる。

見ちゃいけないものを見ている背徳感が指先を震わせるのに、ページをめくる手はどうしても止まらなかった。結局、私は熱に浮かされたように、その生々しい性愛のシーンを最後まで読み切ってしまった。

「はぁ……」

読み終えた瞬間、どっと押し寄せたのは、これまでに感じたことのないような体の火照りだった。顔が熱くて、なんだか気分までふわふわと落ち着かなくて、とても指輪の情報探しを続ける余裕なんてなくなってしまった。私は逃げるように本を閉じ、屋根裏を後にした。

「お嬢様？　どこに行ってたんですか。紅茶、すっかり冷めちゃいましたよ」

玄関ホールで鉢合わせたシオンが、怪しむように目を細めて私の顔を覗き込んできた。

「あ、……ええ、ちょっと、図書室で調べ物を……。集中しすぎて、時間の感覚がなくなってしまったの」

「調べ物に没頭……。……お嬢様、顔が真っ赤ですよ。熱でもあるんですか？」

シオンが心配そうに私の額に手を伸ばそうとしたので、私は咄嗟に一歩下がってそれを避けた。すると、シオンは避けた私の腕を優しく、けれども拒ませない強さで掴み、ぐいと自分の方へ引き寄せた。

「……何、そんなに怯えて。俺、何かお嬢様に悪いことしました？」

鼻先が触れそうなほど顔を近づけられ、シオンの甘い香りが一気に私を

包み込む。彼は空いた手で私のこめかみに流れる髪を指先で弄り、そのまま耳朶をなぞった。

「嫌だな。俺、お嬢様に会えなくて寂しかったのに。……こんなに熱くなつて。図書室で、一体どんな情熱的な本を読んでいたんですか？」

耳元で低くささやく声が、ついさっき本の中で読んだばかりのフレーズと重なって、胸の奥がドロリと熱く溶け出し、激しい痺れに思考が甘く塗り潰されていく。

「だ、大丈夫よ！ 本当に、少し根を詰めすぎただけだから……。先に部屋に戻っているわね」

私は熱を帯びた腕を振り払うようにして、逃げるように階段を駆け上がった。

その日も、その次の日も。私は自分に「指輪の情報を探すためよ」と言

い聞かせながら、吸い寄せられるように屋根裏へ向かった。けれど、実際に開いてしまうのは、いつの間にか場所を覚えてしまったあの禁断のページ。

恥ずかしくて、恐ろしくて、けれどどうしても気になって。シオンの手の温もりや、彼が時折見せる低い声、あの熱い吐息を思い出しながら、何度も何度もそのシーンを読み返してしまう。

もし、いつか指輪を見つけて、あのお願いを叶えてもらう日が来たら。シオンと私が結婚することになったら……。

……彼も、私にこんなことをするのかしら。

夜、一人でベッドに入っても、暗闇の中にあの挿絵とシオンの顔が重なって浮かんでくる。シオンの長い指が私の肌に触れる想像をただけで、心臓の鼓動が早くなってしまう。

第三章 秘密の本

翌朝。

「だめよ、こんなの。……今日こそ、ちゃんと指輪の情報を探さなきゃ」
私は自分に活を入れるように両頬を叩き、部屋を出た。屋根裏へ向かうと廊下を歩いていると、角から現れたシオンと鉢合わせる。

「お嬢様、おはようございます。……また今日もどこかへ行くんですか？
最近、一人でどこに行ってるの。ちっとも俺を頼ってくれないし、二人で過ごす時間が少なくて、正直俺、寂しいんですよ」

シオンはわざとらしく肩を落とし、縋るような視線を向けてくる。

「そんなこと……ないわ。少し調べ物をしていただけよ」

「調べ物？ ……ふうん。俺の顔を見てくれないほど大事なことになるのかな。
お嬢様の隣は俺の特等席だって、いつも言ってるのに。……あんまり放置

されると、無理やりお部屋に連れ戻したくなっちゃいますよ？」

冗談めかしてはいるけれど、その声には確かな熱が混ざっていて、私は逃げるようにその場を後にした。

再び屋根裏部屋へと向かった私は、埃っぽく静まり返った空間で、高い場所に積まれた古い資料の山を見上げる。

「あそこなら、何かあるかもしれないわ」

私は意を決して、壁に立てかけられた古い木製のハシゴに手をかけた。一段ずつ慎重に登っていくと、棚の隙間にあの日の一冊が、まるで私を誘惑するように挟まっているのが見えた。

そういえば、あの本。あまりの衝撃に、官能シーンの先を読んでいなかった。もし、その先に何か重要な情報があったとしたら……。

「……ううん、言い訳ね。でも、最後がどうなるのか、ちゃんと確かめなきゃ」

そんな自分へのもっともらしい理屈を並べながら、私はハシゴの上で危うく身を乗り出し、その本に指をかけた。あと少し、あと少しで届く。

「……お嬢様。そんな高いところで、何をしてるんですか？」

「!？」

静寂を破る突然の声に、肩がビクツと跳ねた。驚きのあまり足元が滑り、ハシゴから身体が離れていく。

「きゃっ！」

無意識に本を抱きしめたまま、私は宙に浮いた。床に叩きつけられる衝撃を覚悟して、ぎゅっと目を閉じる。けれど、次にやってきたのは硬い床の痛みではなく、たくましい腕の温もりだった。

「……危ないな。一人でこんなところで、何をしてるんですか？」

シオンが私の体を横から掬い上げるように、お姫様抱きでしっかりと受け止めてくれていた。彼の胸板の厚みが腕越しに伝わり、シオン独自の清

潔で甘い香りに包まれる。あまりの近さと安堵感で、頭の中が真っ白になった。

「あ……シオン……ごめんなさい、その……」

「怪我はない？ 全く、目が離せないお嬢様だ。……立てますか？」

シオンは私をゆっくりと床に降ろすと、支えるように肩に手を置いたまま、心配そうに私の顔を覗き込んできた。

「だ、大丈夫よ。助けてくれてありがとう」

彼の手の熱が伝わってきて、逃げ出したくなるような、でも離れたくないような不思議な感覚に陥った。

「怪我がないならいい。……で、そこまでして手に入れたかった『お宝』は、一体何なんです？」

シオンの視線が、私が必死に胸に抱えていた本へと注がれた。

「あ、だめ！ それは……！」

私が隠そうとするよりも早く、シオンの長い指が本をひょいと取り上げた。一瞬の沈黙。彼の指がページをパラパラと弄り、あの日私が何度も読み返した、あの「官能シーン」の挿絵で止まった。

シオンの眉がピクリと動いた。

「……お嬢様。これ、なんですか？」

シオンがニヤリと唇の端を上げ、本を私の目の前に突きつけた。そこには、まさに男女が熱く絡み合う、あの破廉恥な光景が描かれている。

「ち、違うの！　これは……！」

顔が一瞬にして沸騰した。言い訳をしようにも、言葉が上手く出てこない。

「違わないでしょ。……ふーん、お嬢様もこういうことに興味持ってるんですね」

彼は、ひょい、とその本を拾い上げた。

「『彼の熱い楔が、秘められた蕾をこじ開け……。』。へえ。お嬢様、勉強熱心なのは知ってたけど、こういうのも守備範囲だったんだ？」

シオンがページをパラパラとめくりながら、意地悪そうに目を細めた。いつもの甘い笑顔じゃない。私の弱みを握ったことを確信した、何かを企んだ笑みを浮かべている。

「シオン、返して……。！　お願い、見ないで！」

「嫌だよ。っていうかさ。俺が毎日こんなに好意をアピールしてんのに、頭の中では本を使ってこんなエッチなこと妄想してたわけ？　お嬢様、意外とむつつりスケベなんだね」

顔が火が出るほど熱い。シオンは本を閉じると、片手を私の横につき、逃げ場を塞いだ。耳元で、彼自身の少し男っぽい匂いと、低い艶やかな声が混ざり合う。

「……そんなに興味あるなら、本なんか読まなくていいのに」

シオンは指先で私の顎をくい、と持ち上げた。無理やり視線を合わせられ、逃げ場を失った。

彼はふっと表情を消し、まるで公務をこなす時のような、凜とした完璧な執事の顔を作ってささやいた。

「俺が本物をお教えしましょうか、お嬢様？ さっきの無機質な文字列なんかより……もっと熱くて、息ができなくなるくらい気持ちいいこと。望むなら、今ここでいくらでも」

そう言って、彼は空いた方の手で私の首筋をゆっくりとなぞり、まるで獲物の頸動脈を確かめるように、親指でトク、トクと跳ねる私の鼓動を抑え込んだ。

「……声、殺せますか？ 誰かに見つかったら、お嬢様の初めての相手が、身分違いの執事だったってバレちゃいますよ」

悪戯っぽく、けれどその奥に底知れない情熱を孕んだ笑みを浮かべ、彼

は私の唇が触れるか触れないかの距離まで、顔を近づけてきた。

「な…!? シオン……!?」

そう言った後に、シオンはふっと力を抜いて笑った。

「……なんてね。冗談ですよ、お嬢様。そんなに怯えないでください」

「え……?」

「さすがに屋根裏でいきなりなんて、俺が旦那様に殺されちゃいますから。ほら、お茶の時間過ぎてますよ。冷めないうちに帰りましょうか」

シオンはいつもの軽快な調子で私の背中を押し、何事もなかったかのよう
に廊下へと促した。

「あ、この本は没収。危ないですからね、お嬢様には」

ひらひらと官能小説を振ってみせるシオンの後ろ姿を追いかけながら、私はバクバクと脈打つ心臓を必死に鎮めていた。冗談。そう、彼にとって
はいつものからかいの一つ。なのに、私の体には、彼に触れられた熱が居

座ったまま離れてくれなかった。

その夜。

お風呂を済ませ、薄手のネグリジェに着替えた私は、寢室のベッドに入ってもなお、昼間の出来事を思い出して悶々としていた。

「……最悪。本当に、どうしてあんなところを見つかったのよ」
枕に顔を埋めて、情けなさに身悶えする。

指輪のヒントを探すどころか、あんな破廉恥な本を読んでいる現場をシオンに押さえられるなんて。しかも、ただ見つかっただけじゃない。

「『むつつりスケベ』だなんて……ひどすぎるわ。あんな……あんな距離で、耳元でささやくなんて反則よ」

思い出すだけで、シオンに触れられた首筋がじりじりと熱くなる。

「もし、彼が冗談じゃなかったら、私はどうなっていたの……？」

そんな恐ろしい想像が頭をよぎり、私は慌ててシーツを頭まで被った。

明日からどんな顔をして彼と向き合えばいいのか分からない。没収されたあの本だって、もしお父様に見つかったらおしまいだわ。

自分に言い聞かせるけれど、彼が口にした「毎日好意をアピールしてる」という言葉が、呪文のように頭の中で反芻される。不安と、正体不明のときめきが交互に押し寄せて、どうしても目が冴えてしまう。

「……はあ。寝よう。考えても無駄だし」

自分に言い聞かせ、ランプの明かりを消そうとしたその時。

ノックの音もせず、静かにドアが開いた。

「……まだ起きてましたか、お嬢様」

「シオン？ どうしたの、こんな時間に」

入ってきたシオンは、燕尾服の上着を脱ぎ、シャツのボタンをいくつか外した、ひどく無防備な姿だった。手には、昼間に没収されたはずのあの

本が握られている。

「寝る前に、読み聞かせでもしてあげようかと思って。お嬢様、これの続き、気になってたでしょう？」

シオンは迷いなく私のベッドの端に腰を下ろすと、マットレスを沈ませながら私ににじり寄ってきた。

「ちょっと、シオン、何して……」

慌てて身を起こし、彼の手にあった本を奪い取ろうと手を伸ばした。けれどシオンは、待ってましたと言わんばかりにひらりと身をかわし、本を高く掲げて私を翻弄する。

「返して！ それ、もう見ないでって言ったじゃない！」

「そんなに必死にならなくても。やっぱり、続きが読みたくて眠れなかったんですか？」

シオンはわざとらしく、ベッドの上に身を投げ出した私のすぐ隣に、

マットレスを沈ませながらにじり寄ってきた。

腕を伸ばして本を掴もうとするたび、薄いネグリジェの肩紐が滑り落ちそうになり、私は赤面して動きを止める。その隙を突いて、シオンは空いた方の手で私の手首をひょいと掴み、羽毛の枕へと押し込めた。

「シオン……放して！」

「しっ……静かに。夜は声が響きますよ？　屋敷の皆に聞こえたら、お嬢様の……むっつりスケベがバレちゃいますよ」

彼は私の耳元で、熱い吐息とともに楽しそうにささやくと、手慣れた様子で片手だけで本を開いた。抵抗しようにも、手首を掴む彼の指先は驚くほど熱く、力強い。

彼は私の反応を心底楽しむように、一文字ずつ、甘く低い声でなぞり始めた。

「……男は、彼女の柔らかな寝衣の隙間に熱い指を滑り込ませた」

朗読の声と同時に、シオンの長い指がネグリジェの襟元から内側へと侵入してきた。

「ちよっと……待って、シオン……！」

私は必死に身を振って、彼の胸板を押し返そうとした。けれど、片手で両手首を封じられている私に抵抗の術はない。シオンは私の焦りなんてどこ吹く風で、むしろ楽しそうに目を細めて、さらに深く、指先を滑り込ませてくる。

「何が『待って』なの？ お嬢様、さっきまでこの続きを読むドキドキしてたんでしょ？」

「それは……そうだけど、でも……っ」

「いいよ、無理に声出さなくても。……本の内容、全部俺が再現してあげますから」

スッ、と指先が肌の熱を直接拾い上げる。